2020 年 7 月 26 日　　1 列王 3:5-12
聖霊降臨後 8 主日　　ロマ 8:26-34
東京聖三一教会　　マタイ 13:31-33、44-49

神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか

東京の感染者が増えて今主日から会衆が参加する礼拝が中止になりました。とても残念です。けれども、今日ご一緒に読んだローマ書のみ言葉は私たちをこのように励ましています。

「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」（ローマ 8:31）

このみ言葉に力を得て、希望を持って今日の試練を乗り越えていきましょう。

さて、私たちが直面しているこのコロナ・パンデミックの状況を乗り越えていくために、まず何を考えなければならないでしょうか？ それは言うまでもなく、医療保健の専門家の助言に従わなければならないということです。けれども、医療保健の知識だけでは安心できないのも現実です。果たして私たちは何を通して安心できるでしょうか？

今日ご一緒に読んだ「列王記」にはこの質問についての答えを与えるための内容が記されています。皆さんもすでにご存知のソロモンの夢の話です。ソロモンは、夢に神様が現れ、願いを言いなさいと言われて、知恵を望みました。長寿や富ではなく知恵を求めたところが際立ってソロモンらしい点です。ところで、ソロモンがもし今日のわたしたちのようにコロナ・パンデミックの状況に遭っていたら何を望んだでしょうか。長寿、つまりコロナ・パンデミックの危険から逃れ安全に暮らすことだったのでしょうか？ もしそのように望んだら、願いは叶えられたかもしれませんが、彼の名は聖書から消えてしまったかもしれません。

一般的に知恵とは、「物事の理を悟り、適切に処理する能力である」と言います。しかし信仰者にとって知恵とは、このような能力を含め、根本的で本質的な姿勢までを言います。私たちはそれを詩編の一節を通して確認することもできます。詩編にはこのように記されています。

「主を畏れることは知恵の初め。これを行う人はすぐれた思慮を得る。」（詩 111:10）

神様を畏れ敬い、神様のみ言葉通りに生きていくことがまさに知恵ある人生であるということです。ですから、私たちの現実では医療保健の知識も大切ですが、それ以上に神様の知恵を通して生きていくことが大切です。

しかし、知恵を求めながら生きていくとしても、人生の現実は簡単ではありません。大きな問題に直面すると、解決の道は容易に見つからず、迫ってきた状況にあたふたすることも多いです。けれども、ご安心ください。パウロは今日ご一緒に読んだローマ書を通してこのように勇気を伝えています。

「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」（ローマ 8:26）

この霊の「言葉に表せないうめき」が、私たちにとって力にならないでしょうか？恐れ、息苦しく、困難な状況に置かれているけれども、聖霊が助けてくださるという信仰、そして神様は必ずわたしたちを良き道へ導いてくださるという信仰、それが私たちにとって勇気になり、力になります。そして倒れた時はこの信仰が私たちを立たせてくれるでしょう。その信仰を確信させるためにパウロはこのように言いました。

「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」（ローマ 8:31）

それでは、今日ご一緒に読んだ福音書に注目してみましょう。福音書には天の国についてのみ言葉が記されています。信仰によって生きて行く信仰者、神様の知恵に頼り生きていこうとする信仰者にとっては、天の国は希望でもあります。けれども、このような天の国は十分な説明や体験がなければ漠然としたものになります。イエス様当時の弟子たちもそう思っていたかもしれません。それで、イエス様が弟子たちに様々な喩えを通して天の国につい

て説明してくださったのです。

それでは、イエス様がおっしゃった天の国をよりよく理解するために、福音書のみ言葉に注目してみましょう。まず、イエス様はからし種とパン種を用いて天の国について説明してくださいました。からし種は 1 ミリぐらいのとても小さい種です。けれども成長すると長さが 3-4 メートルもなるそうです。パン種は見た目はなんてことないものですが、粉に混ぜると大きく膨らみます。ですからこの喩えは、「天の国が実現できるだろうか」という疑問を持った人々に「天の国は、その始めは小さくでも、その終わりは極めて大きくなる」ということを教えてくれるみ言葉です。イエス様は「畑から宝を見つけた人」と「真珠を探した商人」のたとえ話を用いておっしゃいました。この喩えは、「天の国は自分のすべてのものと替えるほどの値打ちがある」ということを教えてくれるみ言葉です。

最後の「漁師が取ったいろいろな魚の喩え」は、「すべての人は天の国に行きたがっていますが、皆入れるわけではない」ということを教えてくれるみ言葉です。つまり、信仰者たちは天の国に入るためには奮い立つ必要があるという意味です。

では、今日私たちが迎えているコロナ・パンデミックの状況下で、どう奮い立つことができるのでしょうか？ コロナ・パンデミックの状況が長びくと、恐れ、苦しみ、漠然とした気持ち、息苦しさによって心の余裕もなくなり、隣人についての思いやりもなくなります。けれども、神様が望んでおられるのは、このような困難な状況にも隣人に対する思いやりです。大げさなことではなく、ほんの小さな実践でもいいです。それは、からし種やパン種のように、とても小さなことによっても大きな結果をもたらしかねないからです。

ドストエフスキーの小説「カラマーゾフの兄弟」には、わたしたちを励ますための寓話が載っています。その寓話を紹介させていただきます。

昔々意地の悪いおばあさんが死にました。そのおばあさんは、生涯善い行いを一切しませんでした。それで悪魔は彼女を捕まえて地獄に投げ捨てました。おばあさんの守護天使は、おばあさんを救うために、神様に申し上げるべきおばあさんの善い行いにはどんなことがあったかと深く考えました。ふと一つ思いついた天使は、「あのおばあさんは畑でねぎを一本抜いて乞食にあげたことがありました。」と神様に申し上げました。すると、神様はこのようにおっしゃいました。

「あなたはそのねぎ一本を持ってきて、地獄の火の中にさしだしおばあさんにそれにつかまらせ脱出させなさい。もしおばあさんがそれにつかまって這い上がってくれば、天の国へ、ねぎがちぎれてしまったら今の所に留まるようにしなさい。」

それで天使はおばあさんのところに駆けつけてねぎ一本をさし出して「さあ、おばあさん、早くつかまって這い上がってきなさい」と言いました。天使はねぎを注意深く引っ張り始めました。ところが地獄の火の中にいた他の罪人たちはおばあさんが這い上がっていく姿を見つけて、自分もそこから脱出しようと我も我もとおばあさんにしがみつき始めました。するとおばあさんは、「私が這い上がるためなんだよ。あなたたちが這い上がるためのものではないんだよ。これは私のねぎであなたたちのねぎではないじゃないか」と叫びながら、人々を足で蹴り落とし始めました。その瞬間、ねぎはブッツリとちぎれ落ちてしまいました。

その後どうなったのかについて説明する必要はないでしょう。このねぎ一本のおかげで、おばあさんは天の国に入ることができたはずです。けれども、おばあさんは自分のことばかり考えていました。その結果、天の国の扉は閉じてしまいました。彼女がもうちょっと勇気をだしたら、他の人にとってもいい機会になったかもしれません。しかし彼女は自分のことだけしか考えていませんでしたから、自分だけでなく、他の人のためのチャンスも失ってしまいました。この寓話は、非常に小さなことをよっても救いを得て、天の国に入ることもできるし、逆に非常に小さなことによって、その門が閉じてしまうこともあるということを知らせてくれます。

私たちは信仰者でありながらも弱い存在です。隣人を助けながら暮らしてはいますが、自分のことばかりに没頭しやすい存在でもあります。危機な状況下ではなおさらです。恐れを感じたら、堅固な信仰さえ揺れます。けれども、その度ごとに勇気を出して神様が教えてくださった賢明な人生を考えなければなりません。それがわたしたちの信仰であり、救いの道であり、天の国への道です。ですから恐れ、揺れ動くたびごとに今日ご一緒に読んだローマ書のみ言葉を思い浮かべてください。

「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。」（ローマ 8:26）

このみ言葉に頼り、神様が教えてくださる知恵に満ちた人生を送ることで、間違いなく神様は私たちに希望をお与えになり、救いにお導きくださり、天の国の扉を開けてくださるでしょう。

この一週、神様の限りない慈しみと恵みに頼り、この世に打ち勝つ勝利の日々になりますように心よりお祈りいたします。